

吉浦町に於ける北辰妙見について  
On the Hokusin-Myoken in Kure, Hiroshima

畝川 哲郎 *Tetsuo Uwekawa*

我が呉市吉浦町に、幸ひにも「妙見さん」と呼ぶ日蓮宗のお寺がある。  
八月の末日、之を訪ねて、ささやかながら得る所があつた。  
先づ妙見さんの像を見ることが出来た。



左圖の如きもので、此の圖の上部には

「南無北辰妙見大菩薩天中星王紫微大帝」

と云ふ文字がある。これについて考證なるものをしてみると、

「北辰妙見」の北辰とは北の星と云ふ意味で、方角の北は十二支の子に當る。これは僧の話によると「本」とか「根本」の義であるさうだ。妙見は「妙ヲ見ス」と讀んで、妙は説明し難い不可思議な優れたものの義であるので、北辰妙見で、天地森羅萬象の根本と言ふ事になる。即ち北辰妙見菩薩が天然の根本であらせられる事になるのである。

次に「天中星王紫微大帝」とは天の中心たる星（即ち北極星）で、星に王たる紫微大帝と言ふ意であらう。支那では北極星を中心とする所謂北極圏内を「北極紫微垣」と言つてゐる。

この北極星は紫微宮の丁度まん中に在る。帝王は小熊座のβ星で、その附近は帝位のもものが一つあつて、北極星ではない。つまり妙見は紫微大帝ではないのである。だが日本では日本流に北極星を大帝としていいと思ふ。

次は前項の圖について説明することとしよう。

（妙見菩薩は、二つ三つ、像が異つたのがある）

頂上は雲、左上は雲上の三日月、右上は太陽。

この三つは圓形で、妙見菩薩の頭と共につながつてゐる。天上を支配する意味である。

右手は降魔の劍、左手は如意寶珠ニヨイ オウジュで、慈悲などを意味する。

足下は菩薩の足にからむ白龍であつて、天に昇る意である。

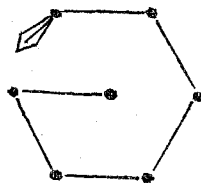
其の下は海龜で、長壽を表す。

最下は波である。



左圖の如きものが妙見さんの紋であつて、七番目の先には劍がついて居る。

これを提灯や幕に紋として右圖の如くにする



これも明に北斗七星である

もう一つは、劍を頭上にふり上げられ、如意寶珠がなくて、人差し指と中指を立てて、大佛さんの手の如くしておられ、相貌は憤怒の色が表はれて居る。

も一つは或る書物で見たのがあるが、妙見菩薩の座像右肩に蓮の花があり、劍先を上にした北斗七星が其の蓮の花の上に畫かれてあるのがあつた。結局僧の話により北辰妙見菩薩は明かに北極星にして北斗七星に非ざる事を確信した次第である。

因に、吉浦町の漁師は北極星を「北の子の星」とか「北極」とか呼び、北斗七星を明かに「みようけんぼし」(妙見星)と呼んでゐる。

**後記** 吳市吉浦町の畝川哲郎君より上記の調査書が届いたので、本誌上に發表することとした。妙見菩薩は日蓮宗にて祭られ、特に關西の能勢の妙見が有名である。又、北辰菩薩とも、尊星王とも云ひ、北極星を佛格化したものである。國土守護、衆生濟度、天災地變の除災、延命、眼の治病などに之を祭る。其の修法を妙見法、或は北斗法と云ふのである。日蓮宗以外に眞言宗、天台宗にても之を祭るが、宗派により、妙見の意義や形像を異にして居る。天台の三井寺などでは、妙見は北極星と北斗七星との總稱であるとして居るやうだが、東密(東寺密教)では妙見は北斗七星を別物として取扱ふ様である。薄草訣と云ふ書によれば「妙見法と北斗法とは開合の不同なり。合する時は妙見と云ひ開く時は北斗と云ふ」とある。何れにせよ、平安朝の頃、最澄、空海などによつて我國に傳來せられたものらしく、其の淵源は支那道教に發して居る様である。我が上代の星辰崇拜史の一頁として、今後の研究を要するものと思ふ。

(S. I. 生) (皇紀2601年9月15日誌)

(第144頁より)

終りに、此の白色矮星の桁外れの密度は、物質の基本的な性質の近代的な概念と全く一致するものであるとの説を繰り返しても、不適當だとは思へない。若し、ガス状態にある原子が、大にイオン化し、即ち、外部の殆んど凡ての電子を剥ぎ取るとすれば、原子の殘餘や、自由電子は、極めて壓搾され、其の結果として出來上る質量は依然としてガスの儘である。恐らく斯様な状態はアンタレス星の様な赤色超巨星を除けば、太陽や凡ての恒星の中心に存在して居るのだらう。又、ある理由の爲に、明らかに白色矮星の殆んど全容積の中に存在して居ると見るべきである。(A. S. P. Leaflet 87, 佐登兒譯)